

# 日本在来織布の研究

## — 葛布について —

小林孝子

### A Study of Cloths Native to Japan

Cloths Woven of Kudzu Plant

(*Pueraria lobata* OHWI)

Takako KOBAYASHI

## I. はしがき

日本在来とは、木綿が伝来し、栽培される以前の織布という意である。柳田国男氏の「木綿以前の事」には、麻・楮・藤・葛・楡などの布名を見ることができる。私はこれらの植物から繊維を採り、布を織る工程を調査したので、逐次報告していきたいと思う。まず今回は葛布について報告する。

葛布については、

をみなへし生ふる沢辺の真田葛原何時かも絡りてわが衣に着む (巻7・1346)

と万葉集にもあるように、すでに当時葛から糸をとり、衣料としていたことが知られる。しかし後世木綿が普及するにつれて、だんだん使われなくなった。掛川誌稿(文化二年)には「葛を以て布を製することは天下特に我掛川のみ古今本州の中すら他郡に出ることを聞かず」と記し、和漢三才図会にも「葛布出於遠州懸川」と記して、すでに江戸中期に葛布は掛川地方のみの特産物とされていた。

ところが、薩藩の三国名勝図会(天保十四年)には、甌島の物産の一つに葛布が記されている。東海道の宿場町掛川とは対照的な、鹿児島本土の西45kmほどの海上に浮ぶ離島甌島にも、さらに九州北部の佐志においても葛布が織られていたのである。

ところで葛は、北は北海道から南は九州に至るまで、山野に繁る丈夫なつる状草本である。牧野日本植物図鑑によれば、「根は肥大にして薬用とし、又葛粉を製す、又茎皮にて葛布を織り、葉は牛馬の飼料とす」と記されているように、古来葛は衣食住万般にわたる有用植物として重宝がられたものである。木綿が普及したあとも、山間離島に葛布の紡織が残っているのも決して不思議なことではない。

## II. 佐志の葛布

佐志は、佐賀県唐津市の農村地帯である(図1)。数年前までは数人の媪が葛布を織っていたが、現在では技術の伝承者は一人だけである。

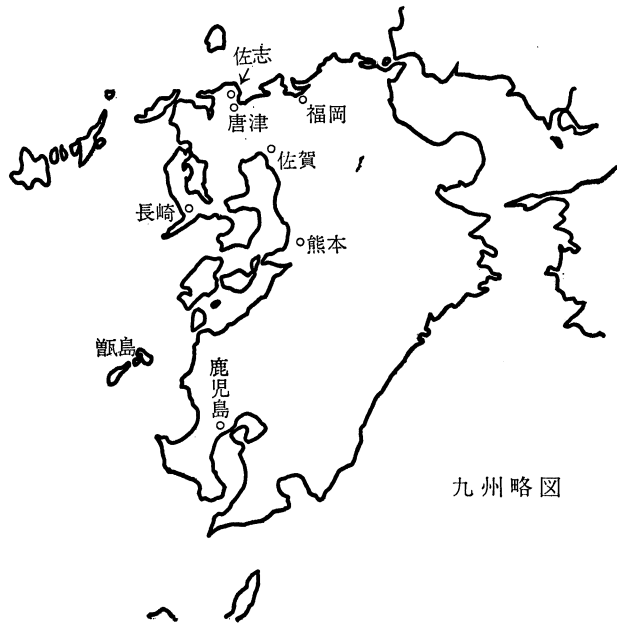


図 1

1. 毎年夏になると山に葛の採集に出かける。葛のつるを一ヒロ半位づつに切って葉を捨て、ひとにぎりづつ束ねたものを家に持って帰る。
2. 持帰った葛の束を釜に入れて、水で茹でる。煮沸後一時間以上茹でる。
3. 茹でたものは、束ねたままヨコヅツ(図2)という木槌で叩き、芯部を取り去る。
4. 土の上に、取り去った芯部(ミ)を敷いて、その上に皮の部分を置き、さらにミをかぶせて数日置く。
5. これに朝と夕に水をかけ、醗酵して外皮がドロドロになってきたときに(図3),
- 3), タライの水に一日漬ける。翌日、川に運んで外皮を洗い落す。
6. 残った白い繊維を陽に干して乾かす(図4)。
7. この繊維を細く割いてつなく(績む)(図5)。
8. 績んだ糸は、糸車で撚りかける(図6)。
9. 緯糸にする糸はヨコウツシ(図7)に巻き、経糸はワク(図8)に巻く。
10. 緯糸はヨコウツシからはずしてカセカケ(図9)にかけ、クダに巻いて抜いたものをヒに入れる(図10)。
11. 経糸は整経し(図11), 箆目に通して地機にかける(図12)。

以上の工程で現在織っているものは、織目の粗い布で、シキノ(図13・15)と称し、蒸器に敷く布として用いる。従来は魚網などにも用いた。

(図15・16)は葛布のヒッカケで、現在福岡市内にあるが、佐志で製作されたものである。経糸は紺木綿糸、緯糸に撚りをかけない葛糸を用いて、美しい光沢がある。

### III. 掛川の葛布

掛川は、広重の東海道五十三次の絵にもあるように、宿場で知られたところである。現在の掛川市は、人口約6万の旧城下町である。(図17)

1. 葛(図18)は、掛川市北部の農村地域で採集する。六月中旬から夏の間採集するが、七月頃採ったものが良質である。採集した葛は先ず佐志と同様水で茹でる。茹でたものはすぐに川の水につける。
2. 5~60 cm ほど土を掘って、その中にカヤ・ススキなどを敷いた上に茹でた葛を並べ、さら

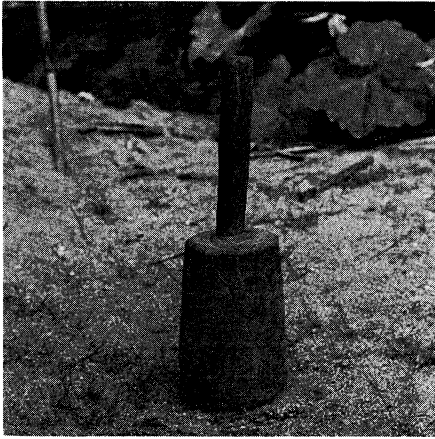


図 2



図 3

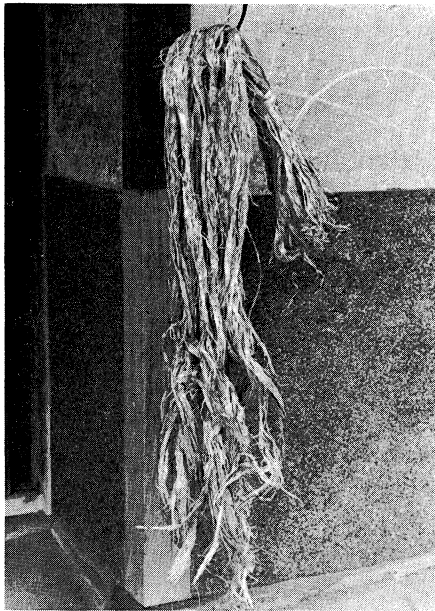


図 4



図 5



図 6

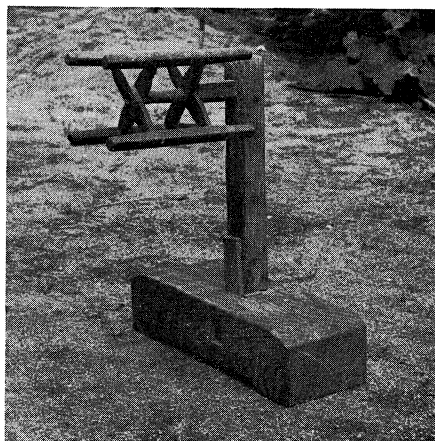


図 8

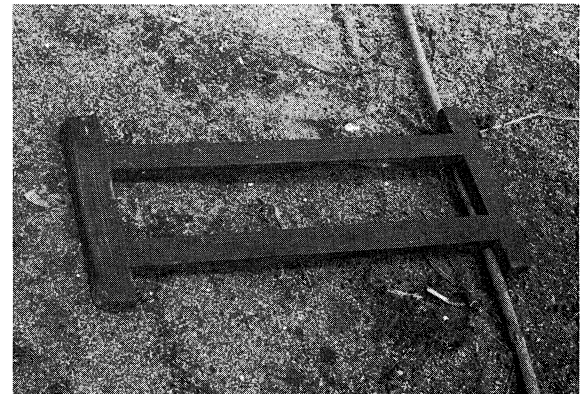


図 7



図9

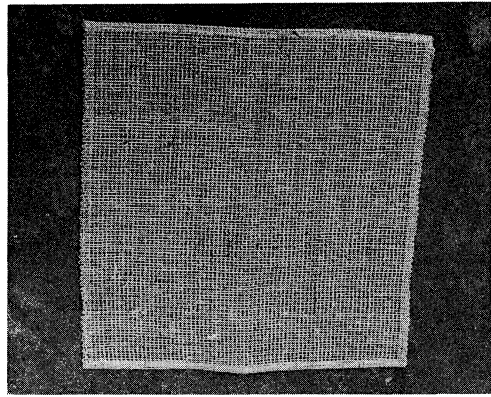


図13

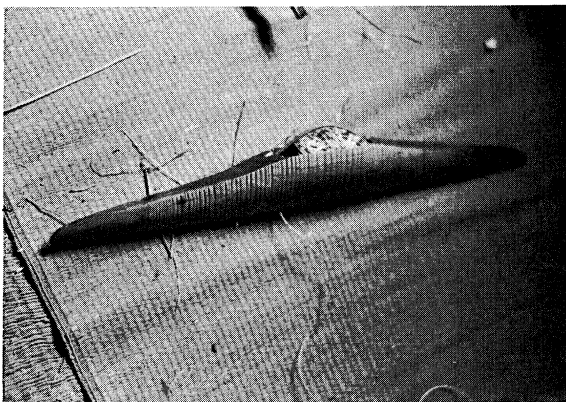


図10

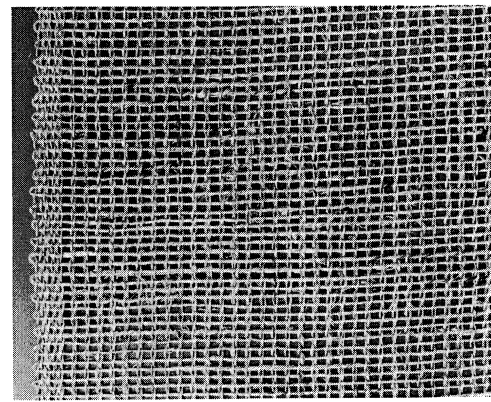


図14

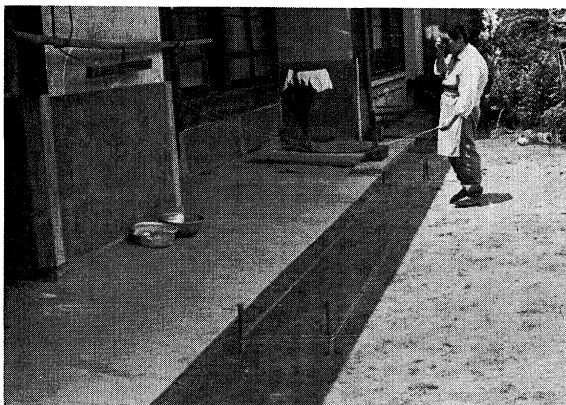


図11

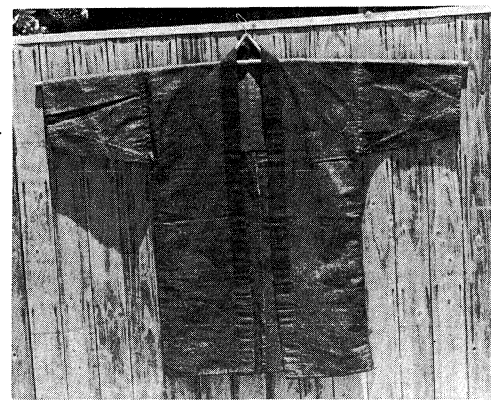


図15

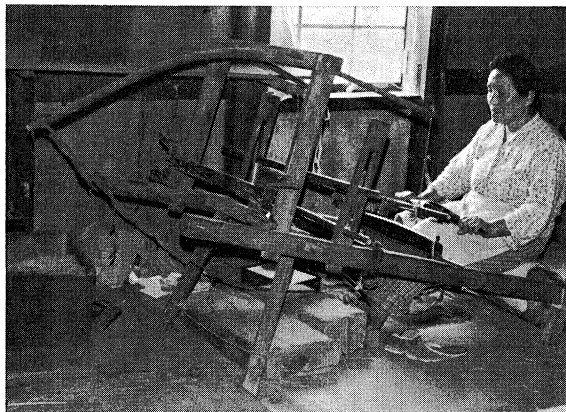


図12

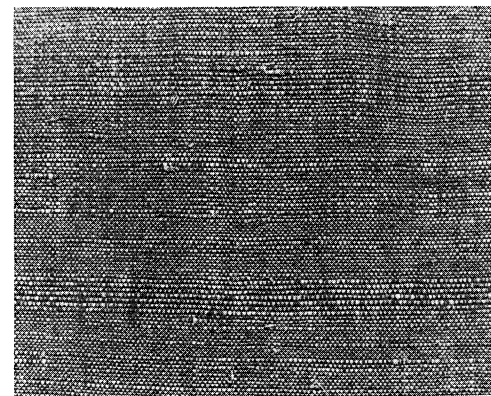


図16



東海道略図

図17



図18



図19

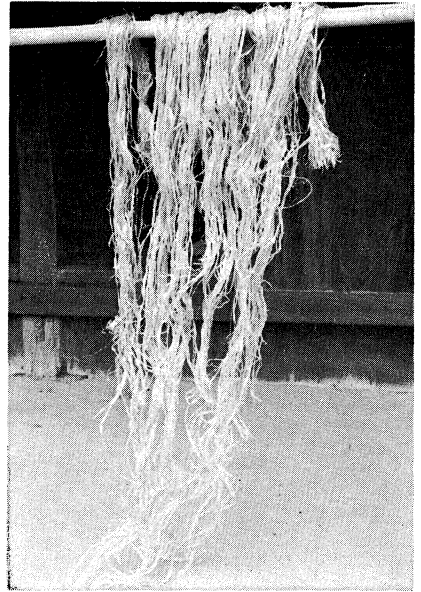


図20

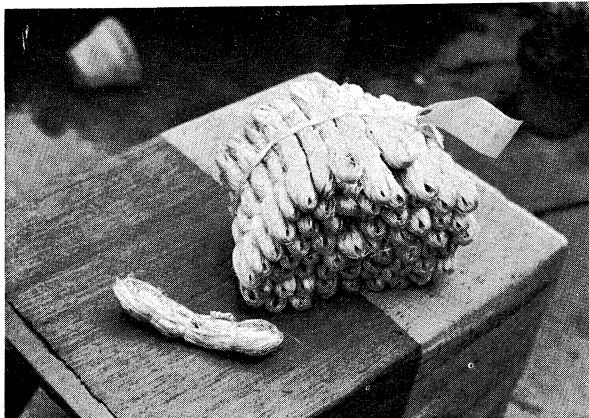


図21



図22

に草を置いて二昼夜位置く(図 19)。

3. 自然醗酵して外皮がドロドロになったら、川の水に浸けてその外皮を洗い落とし、さらに中の芯部を抜きとる。残った繊維は、流れ川でよくすすぎ、乾燥させる(図 20)。
4. 乾いた繊維を細く割いて績み、ハシに巻いて、ヒに入れるように形づくる。これをツグリ(図 21)と称する。採集からツグリまでの工程は、従来近郊農家の副業であった。
5. 現在の掛川葛布の織機は、2枚綜統・4枚綜統(図 22)が使われている。  
尚、掛川では経糸は絹または木綿で、緯の葛に撚をかけない。

すでに和漢三才図会には「緝其皮織布為蹴鞠人袴」と見えるが、城主の奨励もあって、袴地、袴、道中合羽などが盛に作られた。

(図 23・24)は、掛川の紺屋に伝った葛布の見本帖と図案帖である。武家用の丈様が多い。

(図 25・26)は、江戸末期に織られた袴地で、経糸は木綿、緯糸が葛である。

(図 27・28)は、葛布の袴で、経糸は絹、緯糸が葛である。織密度は 1 cm 間に経糸 23 本、緯糸 14 本である。

明治維新によって、武家の袴地などの需要がなくなると、葛布は輪島塗の下地張に処分されるほどの状況であったが、明治 10 年以降は襖張地として東京に売り出された。その後明治 30 年代、壁紙として米国に輸出した結果、grass cloth の名で高い評価を得た。

#### IV. あとがき

以上、九州と掛川の葛布の製法についての調査報告である。

この稿には含まれないが、甌島の葛布は採集してすぐに皮を去り、灰汁で煮るが、佐志と掛川では水で茹で、自然醗酵させる。尚、佐志では醗酵前に芯を抜き、掛川では醗酵後に芯を除く。

織糸としては、甌島と佐志では経・緯糸ともに撚りかけるが、掛川では経糸には木綿や絹を用い、緯糸のみに葛を用いる。そして撚りをかけない。これによって掛川葛布の光沢が作り出される。袴地に木綿と葛とを交織することによって、植物繊維の機能性と、さらに光沢という装飾性とを兼ね備えて、武家の衣料としての要因を完成したものと思われる。

今後も藤布・太布などについて同様の研究を進めていきたい。

本稿は昭和 48 年 10 月 6 日第 25 回日本家政学会で発表したものの一部である。

終りに、この調査のために御協力下さいました多くの方がたに深く感謝いたします。

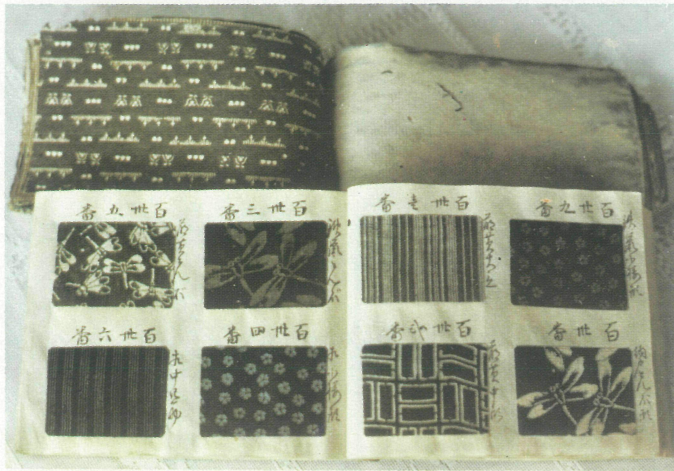


図 23

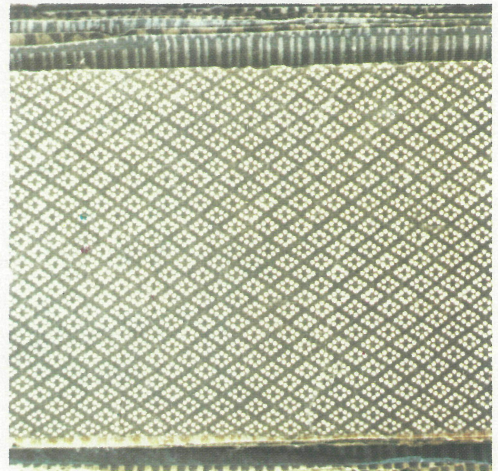


図 24

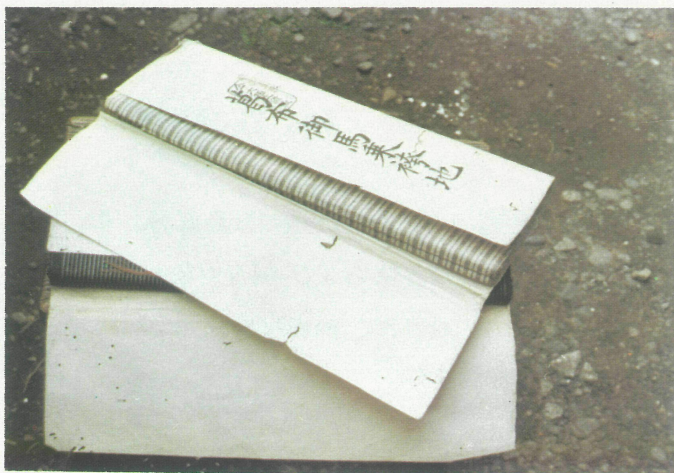


図 25

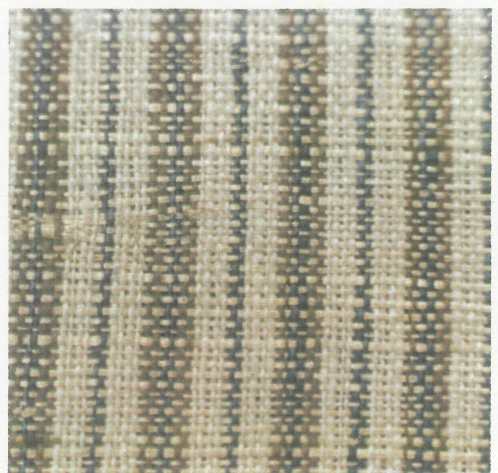


図 26

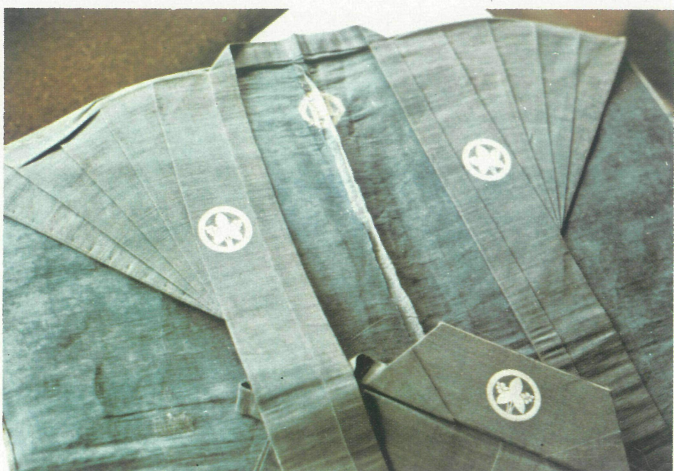


図 27

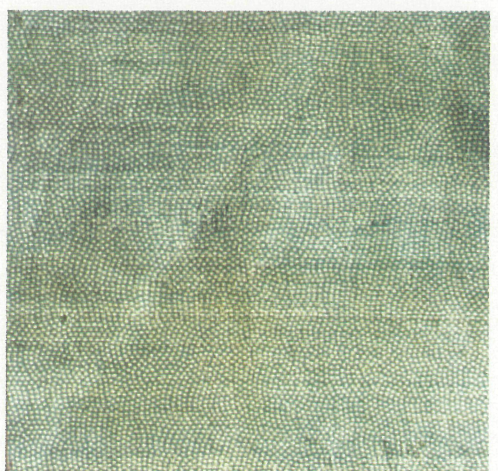


図 28